



あかるく元気な子 だれにも親切な子 しつかり考える子 ことばを大切にする子



目の前にある、この1本の線は…？

○みなさんは、日々学習や運動をしている中で、「分からない」「できない」と思ったり、「しんどい」「面倒くさい」と思ったりすることはありますか。

でもね、だからといって、そこで歩みを止めてしまうと、その先にはもう進めなくなります。いつまで経っても目指していたゴールにたどり着けなくなってしまうます。楽な方へ楽な方へと逃げるのは簡単です。だけど、それでは、人間としての成長が止まってしまうと思いませんか。

今、目の前にあるこの1本の線は、自分の目標を達成するためには「必ず乗り越えなければならない線」です。しかしそれは、「ちょっと頑張れば乗り越えることができる線」でもあるのです。

○もうずいぶん昔になりますが、朝日新聞の「天声人語」に掲載された、現在もバイオリニストとして世界で活躍されている千住真理子さんの話を紹介します。

「何かができるようになるきっかけは、私たちのまわりにたくさんころがっているのよ。何でもいいの。何か自分でやってみたいなあというものがあったら、それができるまで、何十回でも何百回でも練習してみるの。できそうもないと思うことができるようになる。それはとてもとてもうれしいことなのよ。」

それを教えてくれたのは、幼稚舎時代の恩師、中山理先生だった。先生はみなに一本ずつ縄を配って縄跳びの練習をさせた。子どもたちは毎日、休み時間も放課後も、練習を重ねた。二重まわしや三重まわしに挑んでいると、縄の中央がすりへって、切れる。先生は言った。「一生懸命やる人の縄は切れる。そのかわりに必ず跳べるようになる。」



バイオリンの練習も同じだ。正しい方法で楽器を持ち、音を出す練習をくり返す。縄跳びの縄がすりへるように、弦をおさえる左手の指が弦の形にへっこんでくる。どうすれば、バイオリンのあの難しいところが上手になるかと苦しむたびに、千住さんは縄跳びの練習を思った。何十回も何百回も、同じ場所を練習するうちに、いつか指が楽に動いてきれいに曲がひけるようになる。千住さんは、「大きな夢は、ごく小さい、身近な努力から実現するという大切なことを、一本の縄から学んだ。縄が切れるたびに上手になる、という恩師の教えが自分の一生を左右するものになった。」と書いている。

○ごく小さな身近な努力。それは、人によって学習であったり、運動であったり、それぞれ違うものでしょう。でも、自分がこれをやってみようと思ったことは、どんな小さなことでもコツコツと根気強く積み重ねることが大切です。努力は決して嘘をつきません。続けることで分かる世界、見える世界、できる世界がきっとあるはずです。



ほんの少しの頑張りが自分を高めることにつながります。楽な方へと流されそうになる自分に負けないで、目の前にある線をしっかりと乗り越えていく、そんな力を、この阿太小学校で身に付けていきましょう。